

さいじやくしよく

最強職の初級魔術師 3

saijakusyoku
no syokyu
majutsushi

初級魔法を
極めたら
いつの間にか
「千の魔術師」
と呼ばれて
いました。

KATANADUKI

カタナヅキ

ILLUSTRATION ネコメガネ



CHARACTER

黒いスライム

謎のスライム。
何か企んでいるらしい……

ロプス

サイクロプス。
ルノに懐いている。でかい。

デアリ

エルフ
森人族の王子。
甘やかされて育ったため、
性格が最悪。

コトネ

冒険者ギルドに
所属するA級冒険者。
情報収集が得意。

ルノ

勇者召喚に巻き込まれて、
異世界にやってきた平凡な高校生。
ショボい「初級魔法」を駆使して、
危険な異世界を
生き抜こうと奮闘する。

リーリス

帝国四天王の一人。
回復魔法が得意な
非戦闘職(?)。

はるな
陽菜

ルノのクラスメイトで、
異世界に召喚された勇者
の一人。アイドル的存在で
胸が大きい。

スラミン

スライム。
水や氷が大好物。
魔石も食べる。

1

森^{エルフ}人^族のわがまま王子デブリをエルフ王国に引き渡すため、ルノ達移送部隊は、交渉場所である「白^{はくげん}原」を目指していた。

途中、オークロードという強敵に遭遇したものの、ルノの機転によって打ち倒すことに成功する。被害は馬車一台だけに留めることができたのだった。

その後森を抜け、再び草原に出たルノ達一行。

ルノが連れてきた黒^{こくろうしゅ}狼^種のルウやサイクロプスのロプスのおかげで、道中は安全に進むことができた。きた。

順調ではあったが——次の街までは半日もかかってしまうという。また、それまでずっと馬車が一台少ないというのはいろいろ不便である。

というわけで、ルノが先に街に赴き、馬車を手配してくるようになった。なお、バルトロス帝国

の先帝バルトスと、なぜか五人いる帝国四天王の一人であるリーリスが同行する。

× × ×

「じゃあ、これに乗ってください」

ルノが「氷塊」の魔法でさっと氷車を作り上げてそう言うと、バルトスとリーリスが表情を曇らせる。

「本当にルノ殿の魔法は何でもありじゃのう……これでは馬車の必要性を疑うわ」

「今回は普通自動車の氷像ですか……免許は持ってますよね？」

リーリスの質問にルノは冗談交じりに答える。

「この間、ゴブリンを轢き逃げして免停くらっちゃって……」

バルトスとリーリスが乗り、最後にルノが乗ると氷車が浮上する。その光景を見た兵士達は驚き、呆然としていた。

「じゃあ、すぐに戻ってきますので……出発!!」

ルノはそう言うと、氷車を一気に加速させた。

「ぬおおっ!」

「ちよ、法定速度は守ってくださいよ!」

驚くバルトスとリーリスをよそに、氷車は動きだして間もなく、時速二百キロを超える速度に達するのだった。

約一時間後、ルノ達は街の近くに立つ砦に到着した。ルノは帝国兵に事情を伝え、新しい馬車の手配を頼む。

そこへ街の兵士がやって来て、予想外の情報をもたらした。

驚いたバルトスが声を上げる。

「何っ!? 火竜が現れたじゃと!」

「は、はい……最初は我々も信じられませんでした。火竜の目撃情報が次々と届けられます」

兵士は顔を真っ青にして続ける。

「最近、近くの火山が噴火したのですが、それで火山を棲家としていた火竜が暴れたのです。

我々も対処に困ってまして……」

「むうっ、困ったのう。しかしいったいどうすれば……」

顔をしかめるバルトスに、ルノは何気なく尋ねる。

「そんなにまずい相手なの？」

バルトスに代わってリーリスが答える。

「竜種は魔物の中でも最強の存在ですからね。オークロードとは比べ物にならないほどやばいですよ」

「どうやら火竜は棲家を移そうとしているらしい。そうであるならば、バルトロス帝国が軍隊を出して討伐する必要があるのだが、今はタイミングがまずかった。」

バルトスが頭を抱えて言う。

「まさかこんなときに……エルフ王国との会談が終わっていない今、軍隊を動かすことはできませんのう」

「え、そうなの？」

ルノが声を上げると、リーリスが説明する。

「今は、エルフ王国の国王がバルトロス帝国領土に近づいているんです。そんなときに帝国が軍隊を動かせば……良いふうには捉えないでしょうね」

「それなら事情を説明すれば……」

ルノが疑問を挟むも、リーリスは首を横に振る。

「そんな簡単な話じゃないですよ。両国の関係は冷えきっているんですから。また仮に、軍隊を動かすとしても容易ではありません。兵糧ひやうりやうの準備をし、竜種に対抗するための兵器を用意しないとけませんし」

バルトスがため息交じりに付け加える。

「森に棲み着いたオオツノオークも討伐しなければならんぞ。あの森を抜けなければたどり着けんからな。まったく、次から次へと問題が起きるのう」

彼のぼやきに呼応するように、帝国の兵士達は大きく肩を落とした。

バルトスはさらに続ける。

「それにしてもこの地方は本当になんておる？ オオツノオークやオークロード、火竜まで現れるとは……」

「確かにおかしいですね。こんなに離れた地域まで、西の森で起きた生態系異常の影響が出ているんですかね。それは考えにくいですが……」

リーリスがそう口にするると、兵士の隊長が神妙な面持ちで告げる。

「おかしいといえば……これは火山が噴火する前の話なのですが、何やら怪しい動きがあったよう
で……」

「ほう？」

バルトスが反応すると、隊長は次のようなことを語った。

火山が噴火する数日前、街に森エルフ人ツ族の集団が訪れ、住民に妙な聞き込みをしたという。

火竜の棲む火山はどこか、近辺にはどのような魔物が棲息しているのか、そうしたことを丹念に調べ回っていたらしい。

火竜の居場所はともかく、魔物の情報は冒険者ギルドに尋ねるのが一番なのだが、なぜか彼らは

街の住民にだけ聞いて回ったようだ。

そして森人族の集団が去った翌日、火山が噴火し、火竜が出現した。兵士達の中には、その森人族が犯人だと決めつけている者までいるという。

一通り話を聞き、バルトスとリーリスは首を傾げる。ルノも同じように、違和感を抱いていた。

「森人族の集団がのう……」

「これは……エルフ王国が関与しているんでしょうかね？」

「うんっ……」

三人がしばらく無言になっていると、やがてバルトスが口を開く。

「エルフ王国の者達が関わっていると考えるのが普通じゃろうな。儂らがこの地を訪れるタイミングを狙って、火竜を動かしたのかもしれない。だがしかし、それにしても行動がどうにも目立ちすぎる」

続いて、リーリスが疑問を口にする。

「それに、火竜を頼った意味が分かりませんね。火竜で私達を襲撃したら、護送している馬鹿王子も無事では済みませんか」

「魔物使い……だっけ？ 魔物使いなら火竜を上手く操作して……」

ルノがそう言うと、リーリスが否定する。

「魔物使いはそんなに万能な職業ではないですよ。竜種を使役するなんて……伝説に名前を刻むく

らしいの実力でないと」

実際、竜種を操作するには、「英雄」ほどの実力がなければ不可能である。竜種を操れる魔物使いは、この時代に皆無だと言われていた。

バルトスが言う。

「やはり、住民にだけ聞き回っていたということが気になるのう。何か理由があって冒険者ギルドを頼れなかったのだろうか、結果として多くの目撃情報を残してしまっておる。行動が雑すぎるのう」

「あの馬鹿王子じゃないんですから、慎重な森人族がここまで雑な行動をするとは思えませんね」

「でも、それならその集団は何者だったんだろう？」

リーリスの言葉にルノがそう口にする。

すると、バルトスが隊長に疑問を呈する。

「どんな容姿だったか分かるか？」

「森人族であることは分かっていますが、全員フードで頭部を覆い隠しています……それでも住民からの情報を頼りに、一応は似顔絵を作成しています」

「ほう」

隊長がバルトスにいくつかの似顔絵を手渡すと、バルトスは目つきを鋭くする。そして、すぐに首を横に振って、リーリスに絵を渡した。

「フードで見えなかった割に、ずいぶん描けているんじゃないな。だが、儂には見覚えがないな。エルフ王国の有力者の顔はほぼ知っておるが、この中にはおらん」

「うくん……フードで顔を隠したまま行動するのは怪しいですね。それにもかかわらず、街の住民には、森人族とばれてしまったわけですか……」

「ということは……」

ルノがリーリスに続いてそう口にする、バルトスが答える。

「エルフ王国の差し金、とは限らんということじゃ。バルトロス帝国とエルフ王国に仲違いさせようとする、別の組織がいるのかもしれないのう」

「……魔王軍？」

「断定はできんがな……」

ルノが言った「魔王軍」とは、バルトロス帝国領土内でテロ活動を引き起こす勢力である。バルトスはそれを否定せず、額を押さえつつ言う。

「ともかく、今は火竜の件を何とかする必要があるのう。仕方ない。ここはエルフ王国に頼んで、会談を延期してもらうか」

リーリスが意見を言う。

「ルノさんの魔法で、あの馬鹿王子を送り届けなければいんじゃないですか？」

「いや、ああ見えてもあの馬鹿王子は帝国にとつては大きな取引材料じゃ。易々と渡すわけにはい

かん。残念だが、会談は延期じゃ。すまないが、ルノ殿。儂らを例の氷の車で帝都に送ってくれんか？」

そこへ、ルノが妙な質問をする。

「あの……その火竜というのは、そんなに強いですか？」

「[[[[[………]]]]」

誰もが黙り込み、「何を言っているんだこいつは？」という表情を浮かべる。

しかし、ルノは続ける。

「何なら、俺がその火竜を倒しましょうか？ ほら、馬車にいたとき、竜種でも俺なら勝てるって言ってみましたよね？」

「[[[[[………]]]]」

バルトスは言った本人であるが、啞然としていた。

一方で、ルノは己の規格外の力を自覚し始めていた。自分なら火竜を倒せるのではないかと考えていたのだ。

バルトスは我に返ると、慌てて止める。

「い、いや……確かにルノ殿ならば竜種を倒せるかもしれないが、しかし危険すぎる」

「でも、このまま放置していたら危ないですよね？」

「まあ、そうですね。この街に襲いかかってきたら大きな被害が出るでしょう。今から住民を避難

させても間に合うかどうか……」

「リーリス、余計なことを言うな!! これは帝国の問題じゃぞ!」

「それなら、帝国に世話になってる俺が動いてもおかしくないんじゃないですか?」
ルノの言葉に、皆押し黙ってしまった。

すでに火竜と戦う覚悟を決めていたルノは、近くにいた兵士に尋ねる。

「その火竜というのは、どこにいるんですか?」

「え? えっと……新しい報告によるとこの街の東側に……」

「言うでない!!」

「も、申し訳ありません!!」

バルトスに怒鳴りつけられた兵士は、慌てて頭を下げた。

そこへ、轟音が響き渡る。

「グガアアアアアアアッ!!」

荒々しい鳴き声である。

直後、建物が激しく振動した。何事かと全員がその鳴き声が出たほうに視線を向けると――慌てふためいた様子で一人の兵士が走ってきた。

「た、大変です!!」

「どうした!？」

「火竜が……火竜がこの砦に!!」

即座にルノは外に飛び出すと、バルトス、リーリスも後に続く。

崩壊した倉庫の上に、巨大な生物がいる。それは、西洋ファンタジーのドラゴンそのもの見た目をしていて。

「アアアアアアアッ!!」

体長十五メートルを超える巨体を前に、ルノは一步後ずさる。

「くっ……!？」

「か、火竜……どうしてこんなに早くっ!？」

火竜が着地した場所は、兵士達の武器を取めている武器庫であった。火竜の重量に耐えきれず崩れてしまったのだ。

火竜は口を大きく開くと、口内を赤く輝かせる。

「まずい……炎を吐くつもりですよ!!」

リーリスが声を上げた瞬間、火竜は炎の息を火炎放射器のように放った。

「アガアアアアアアッ!!」

「「「うわああああああっ!？」」「」」

「いかんっ!!」

逃げ惑う兵士達に向け、火竜は火炎を吐き散らす。

バルトスが炎に吞まれそうになった兵士に手を伸ばしたところ、ルノが彼の前に立って手のひらをかざす。

『氷塊』!!」

「アガアッ!」

「えっ……!?!」

火竜は頭部に巨大な氷を叩きつけられ、後ろ向きに倒れた。

火炎が上向きに放たれる。

これで兵士を助けることはできたものの、激昂した火竜の標的がルノに移った。

「こっちだ!!」

「ダガアッ!!」

ルノが声を上げて挑発すると、火竜は身体を起こした。そして尻尾を振るって彼を押し潰そうとする。

寸前でルノは回避するが、尻尾の先端が触れただけで建物が粉々になった。

ここで戦うのはまずいと判断したルノは、「氷塊」の魔法で氷板を足元に生みだして浮き上がる。

「こっちだ、トカゲっ!!」

「ガアアアアッ!!」

「だ、だめじゃっ!! 戻ってこい、ルノ殿!!」

上空に飛んだルノを追うため、火竜も翼をはためかせて浮上する。バルトスが止めようとするが、ルノは戦闘準備を整えていく。

「さすがに今回はやばいかも……『氷塊』!!」

ルノは「氷塊」を発動し、デブリ達の騒動の際に使用した氷鎧をまとった。これで防御力を上昇させつつ、さらに氷板の速度を上げる。

「アガアアッ!!」

「うわっ……隕石!?!」

火竜の口から出たのは、先ほどの火炎放射ではなく火炎の弾だった。

まともに当たれば危険だと判断したルノは弾に手のひらを向け、いつもより大きな氷盾で受け止めた。

「くううっ!?!」

しかし、火竜は追撃とばかりに火炎の砲弾を撃ってくる。

衝突するたびに氷盾が蒸発するが、氷鎧をまとっているため、ルノがダメージを受けることはない。

「やばい……螺旋氷弾!!」

「アガアッ!!」

ルノが放った螺旋状の氷の砲弾と、火竜の放った火炎の砲弾がぶつかる。空中で火炎と氷の破片が四散した。

「くそ、この程度の攻撃じゃだめか……うわっ!?」

「グガアッ!!」

火竜が大きく口を開いてルノを呑み込もうとしたが、彼はとっさに上昇して回避する。

氷板の移動速度をさらに上げて距離を取ろうとするが、火竜も速度を上げて追いついてくる。そして、至近距離から先ほどのように火炎を放射する。

「アガアアアアアッ!!」

「くわっ!?」

氷鎧のおかげでダメージは受けなかったものの、強力な炎によって氷鎧は溶け始めていた。完全に溶かされる前にルノは炎から逃れようとするが、火竜は執拗に追ってくる。

「ガアアッ!!」

「うわっ!?」

火竜が両翼を激しく羽ばたかせると、強風に煽られたルノは体勢を崩して落下してしまった。

ルノは何とか体勢を整えようと手を伸ばし、風の能力を上昇させる強化スキル「暴風」を発動し

た状態で魔法を放つ。

「『風圧』!!」

「グギャッ!?」

ルノの手のひらから竜巻が放たれ、火竜を吹き飛ばした。火竜は慌てて体勢を整えようとするが、そのまま地面に叩きつけられる。

それでもまだ、火竜は向かってこようとす。

「グガアアアアッ……!!」

「しっこいな……『白雷』!!」

火竜の肉体に白い電流が迸った。火竜は苦悶の表情を浮かべるが、なぜか電流は数秒ほどで消失してしまった。

火竜が再び起き上がってくる。

「グガアアアアッ!!」

「あれっ!?!」

通常であれば、「白雷」は生物を麻痺させることができる。

だが、火竜の身体が大きすぎたのか、雷属性の耐性を持つのか、どちらにしてもこれまで無類の強さを誇った「白雷」は火竜に通じなかった。

「アガアッ!!」

「うわ、またあれか!？」

火竜は火炎の砲弾を、ルノに向かつて的確に放つ。

ルノは、溶けかかった氷板スエーを操作して砲弾を避け続けた。一発でも当たれば、無事では済まないだろう。

どう対抗するか考えていたルノは、火竜の足元が草に生お茂しげつていることに気づく。

「これはどうだ!! 『光球』!!」

「ガアツ……!？」

複数の光の球を一度に生みだし、火竜の周囲に拡散させる。

突然光の球体に囲まれ、火竜は戸惑う仕草しぐさを見せる。ルノはその隙を逃さず、光の魔法に作用する強化スキル「浄化じょうか」を発動させた。

「絡からまれっ!!」

「ガアアアアツ!!」

火竜の足元の草が急速に成長し、その巨体にまとわりつく。

植物が火竜を完全に拘束した。火竜の動きを押さえることができ、ルノは気を抜いてしまうが——相手は生態系の頂点に座す竜種である。

「アガアアアアアアアアツ!!」

火竜は力づくで植物を振り払い、炎を吐いて一帯を焼き払った。

焦ったルノは賭けに出ることにした。

「これならどうだ!!」

「ダガアアアアツ!!」

ルノが放ったのは、複数の属性を組み合わせた最強の合成魔術ごうせいまじゆ、黒炎槍だ。

黒い炎の槍が火竜に突き刺さる。

一瞬だけ巨体が揺らいたが、表面の鱗うろこを少し焦がした程度だった。

火属性の魔法は効果が薄いだろうとルノも思っていたが、あまりにも呆気あっけなかった。「白雷」もだめ「黒炎槍」もだめとなれば、ルノに残された手は残すところ一つである。

「頼む……これで終われ!!」

両手を広げたルノは「氷塊」の魔法を発動させて、丸鋸まるのこのような巨大な円盤状の水を生み出す。

殺傷能力が高いので使用を控えていた回転氷刃かいてんひょうじんだ。

放たれた二つの氷の円盤は、高速回転しながら火竜に近づく。一方火竜は口を開き、巨大な火の弾を放った。

「アガアツ!!」

回転氷刃と火炎の砲弾が衝突し、砕け散って周囲に散らばる——回転氷刃の一つは残っており、

火竜の背後から斬りかかった。

しかし火竜は尻尾を振り上げ、回転氷刃に叩きつけてその軌道を逸らした。

「ダガアアアッ!!」

「くそっ!!」

回転氷刃が地面に落ちる。ルノは自分の持つすべての魔法が破られたことにショックを受けていた。

「アガアアアアアッ!!」

「『氷塊』!!」

火竜は顎が外れかねない勢いで口を開き、ルノに向けて火炎放射する。ルノはとっさに手のひらを出して氷盾を作るが、あまりの熱量に溶かされていく。

「くうっ!! こうなったら……」

ルノは手を構えながらステータス画面を開き、危険すぎるため封印していた、氷の属性に作用する強化スキル「絶対零度」を解放する。

その直後、氷盾が激しい冷気を放ち、火炎をはねのけた。

ルノは安堵の息を吐く。

「ふうっ……ひとまずこれで大丈夫か」

「アアアアアッ……!?!」

体力が切れたのか、火竜は全身を激しく震えさせながら口を閉じ、酸欠を起こしたように地面に伏せた。

ルノは氷盾を解除し、反撃に転ずる。

「螺旋氷弾っ!!」

「ダガアアアッ!?!」

氷の砲弾が手のひらから放たれ、火竜の右腕に命中する。そして火竜の手を地面に張りつけるように、深く突き刺さった。

火竜は氷を引き抜こうとするが、「絶対零度」で強化された氷は凄まじい冷気を放ち、突き刺さった個所から火竜の肉体が凍結していく。

「ガアアッ!!」

反対の手を使って突き刺さった氷を弾き飛ばしたが、すでに火竜の右腕は凍りつき、氷に触れた左の手も凍結していた。

火竜は火炎を吐いて溶かそうとしたが、消耗のためそれもままならない。

「まだまだっ……この数はどうだ!?!」

「ガアッ……!?!」

ルノは手のひらを前に出して四つの螺旋氷弾を生みだし、そのまま放った。

「どりゃあっ!!」



「ゲガアアアッ……!?!」

螺旋氷弾が次々と火竜の肉体に突き刺さり、同時に凍らせていく。火竜は暴れ回ったが、それによつて凍った肉体がひび割れていつてしまふ。

「ウガアアアアッ!?!」

「……いつもくらえっ!!」

さらにルノは雷属性の強化スキル「紫電^{しづでん}」を解放し、紫色の電撃を放つ。速度の速い電撃を、追い詰められた火竜が避けられるわけもなかった。

「アガアアアアッ……!?!」

「まだ生きてるな。あと少しだと思っただけど……」

複数の強化スキルを使用しているにもかかわらず、火竜は生き延びていた。

ルノはそんな火竜を見つめながら、額から汗を流す。だいぶ魔力を消耗しているため、次の魔法で確実に仕留める必要があった。

ここでルノは、さらに強化スキルを解放する。

「これでよし……いくぞっ!!」

「アアアアアアッ……!!」

身悶^{みだた}える火竜をこれ以上苦しませずに倒すため、ルノは火属性の強化スキルである「灼熱^{しやくねつ}」を解放した。そして手のひらを構え、火属性、闇属性、風属性の一撃を放つ。

「黒炎槍!!」

ルノの手のひらから黒い火炎の槍が放たれ、火竜の頭部を呑み込む。先ほどの黒炎槍と、その威力は段違いであった。火属性に耐性がある火竜の頭部を消し飛ばし、さらに胴体を貫いたのだ。

そのあまりの威力にルノは戸惑っていた。強化スキルの組み合わせにより、彼の想像を絶する威力を引きだしてしまったらしい。

「これはまずいな……絶対に人間相手には使えないよ」

《「闇夜」の熟練度が限界値に到達しました。これにより強化スキル「漆黒」が解除されます》

《すべての属性の強化スキルが解除されました。これにより「初級大魔導師」の称号を得ました》

「おおっ!?!」

火竜を倒したことで「闇夜」の熟練が上昇し、ついに闇属性の強化スキル「漆黒」を手に入れた。これですべての強化スキルを習得したことになる。

さらには初級大魔導師という謎の称号を得た。

「あ、しかもレベルが85にまで上がってる!! 火竜ってそんなにやばい奴だったのか……」

70レベルを超えれば、歴史に名を遺す「英雄」になれると言われている。ルノは異世界にやって来てからたった数か月でその領域に達してしまったのだ。

× × ×

ルノが火竜と戦闘を繰り返している頃、バルトスとリーリスは負傷した兵士達を治療し、一休みしていた。

二人は騒動の黒幕について話し合う。

「この武器庫が真つ先に襲われたことが気になるのう」

「竜種はそんなに頭が良くないですからね。偶然ではないのですから、どうやって……」

「バ、バルトス様!!」

そこへ、武器庫の残骸を撤去していた兵士の一人が声を上げた。その手には、髑髏の形をした水晶が握られている。

バルトスとリーリスはそれを見て、大臣デキンが持っていたペンダントを思い出した。魔族であったデキンは、髑髏のペンダントによって見た目を変えていたのだ。

「……もしや魔王軍か?」

「ちよっと貸してください……う、これはまずい代物ですよ」

即座に「鑑定」の能力を発動させたリーリスは顔をしかめる。この水晶は魔道具で、魔物を引き寄せる力を持っていた。

「魔物を刺激する匂いを放ちます。私達は何も感じませんが、嗅覚が鋭い魔物ほど興奮するようですね。つまり、火竜がここを襲ったのは偶然ではないでしょう」

「ということは……兵士の中に魔王軍の間者が……!?」

バルトスがそう言うと、兵士達が驚いて視線を向けてくる。

リーリスは罫體を布で包み、そしてゆっくりと告げる。

「ここにいる兵士を全員集めましょう。この騒ぎの中、姿を消した人はいますか？」

兵士達は周囲を見回してあたふたしている。しばらくして、兵士達の一人が言いにくそうに口を開いた。

「あ、あの……実は兵隊長の姿が見えないんですけど……」

「そういえば……どこにも見えないな」

他の者達も隊長が消えたことに気づきキョロキョロしだすと、リーリスが質問を向ける。

「この武器庫は普段、誰が管理しているんですか？」

「えっと……少し前までは交代制で全員がやっていたんですが、最近は兵隊長が進んで見ていました」

「そういえば勝手に入ると、滅茶苦茶怒られたよな。昔は出入りしても何も言わなかったくせに」

バルトスが兵士達に尋ねる。

「その隊長の住んでいる家は分かるか？ 家族を知っている者はいるか？」

「いえ……隊長はこの砦で寝泊まりしています。家族は二年くらい前に火事で亡くなって……それ以来厳しくなられて……」

「ふむ……」

バルトスはリーリスに振り返り、無言で頷く。二人は、隊長が魔道具を武器庫に仕掛けたのだろうと判断した。

しかし気になるのは、どうして隊長がそのようなことをしたのか、である。

リーリスが尋ねる。

「それ以外に、隊長が変わったことはありませんか？ 大きな借金をしていたり、今までとは違う性格になったりとか……」

「いや、そう言われても……厳しい方ではありましたが」

「あ、だけど最近は何かに甘くなつてなかったか？ 武器庫の出入りには相変わらず厳しかったけど、他の問題は割と見逃してくれたよな。仕事中に酒を飲んでも怒らなかつたし……あつ」

「ほう、勤務中に酒か」

バルトスが眉をひそめる。

「も、申し訳ありません!!」

リーリスが気になるのは、武器庫に入ること以外の問題行動を見逃していたという点だ。彼女は兵士の宿舎に視線を向ける。

「隊長は家族を失ってからここに住んでいたんですね？ 隊長の部屋まで案内してもらえますか？」

「あ、はい!! どうぞこちらへ!!」

兵士は二人を兵隊長が使用している宿舎の個室に案内し、鍵を開けて部屋の中に入れた。部屋の中は綺麗に掃除されており、特に変わった様子はない。

周囲を見渡しながらバルトスが呟く。

「ここが隊長の部屋か？ 特に怪しい物は見当たらないが……」

「あれ？ おかしいな……」

案内した兵士は、部屋の様子に首を傾げている。

「どうした？」

「いえ、自分が前にこの部屋を訪れたときは、ここまで整理されていなかったはずですが……一か月ぐらい前はもっと散らかっていました。隊長、掃除嫌いのくせに部屋に入られるのをすごく嫌がっていて……」

それでピンと来たリーリスが言う。

「なるほど……武器庫の出入りを禁じる、問題行動を見逃す、そして綺麗に掃除された部屋……当たり前ですね」

「すぐに砦の捜索を行え!! 他に何か手がかりが残っているかもしれない!!」

バルトスがそう言うと、兵士は慌てて従った。

「は、はい!!」

こうして調査が開始されたのだが、リーリスの本命はこの部屋だった。彼女は直々に部屋の中を調べることにした。

× × ×

ルノは火竜の死骸しがいの上に立ち、どう取り扱うか悩んでいた。

これほどの大物なので素材が貴重なのは間違いないが、何分大きすぎる。「氷塊」の魔法や収納石を利用したとしても、すべて運ぶのは難しいと思われた。

「う〜んっ……爪とか鱗とか使えそうなんだけだな」

頭部は消失してしまっているが、それでも素材はたくさんある。並の金属よりも頑丈な爪や鱗の類たぐいは、いろいろな用途がありそうだった。

だがルノが気になるのは、経験石があるかどうかである。

「経験石だけでも回収しておきたいな。これだけ大きいんだから、すごい経験石が手に入りそうなんだけど……見つけたらドルトンさんに持って行ってあげよう」

ルノはお金に困っていないため、いろいろと世話になっているドルトンの店に火竜の素材を持ち込もうと考えていた。

回転氷刃で胴体を切り裂き、素材を剥ぎ取りながら体内を調べていく。胸元を切り開くと巨大な物が出現した。

「うわっ、びっくりした!! もしかしてこれが経験石なのか?」

現れたのは、二メートルを超える巨大な赤い物体だった。試しに手のひらをかざすと、強い熱気を放っている。

おそらく火竜の経験石だと思われるが、これまで見た経験石とはサイズが明らかに違う。相当な経験値を蓄積していることが予想された。

「う〜んっ……これはさすがに『氷塊』で持ち帰るのは面倒だな。収納石に入るといいんだけど……」

発見した火竜の経験石に向けて、ルノは右腕の収納石のプレスレットを発動させてみる。すると、どうにか異空間に回収できた。

しかし、鱗や爪も回収しようとしたら重量制限を迎えてしまい、勝手に異空間の出入り口が閉じてしまった。

「あ、これ以上は入らないのか……仕方ない、運搬するための乗り物を『氷塊』で作るかな。レベルも上がってるし」

複数の大型トラックを生みだそうとしたとき、不意に死骸の首に何かが光っていることに気づく。

「何だこれ……刃?」

落ちていたのは黒い剣だった。

ルノは触れるのは危険と判断し、氷の腕鉄甲うでてつこうを作って慎重に拾い上げる。

見た目は黒い短剣だが、相当な業物の風格わざぶつがある。試しに火竜の死骸に突き刺すと、易々と硬い鱗を貫いてしまった。

「普通の金属じゃないな……すごく硬い」

なぜ火竜の首に刺さっていたのか不明だが、念のために回収しておく。火竜が唐突に現れた手がかりになるかもしれない。

その後、火竜を運びだす前に、ルノは一度街に帰ることにした。

バルトスとリーリスと合流し、移送部隊に戻ろうと決めたのだ。しかしやっぱり、火竜の死骸を放置して大丈夫なのかと不安を覚える。

「魔物が死骸を狙う可能性もあるな……しょうがない、面倒だけど持って帰るか」
そこで、ルノはある考えを思いついた。

そうして「氷塊」を発動させ、火竜を運搬するために氷像を作り上げていった。

× × ×

一方その頃、ルノが成長させた植物に拘束されていたオオツノオーク達が解放された。ルノ達が通り過ぎてから、すでに一時間以上経過している。

オオツノオーク達が、親であるオークロードの亡骸なまがらに集まる。

「ブヒヒヒッ!!」

「ブギイヒッ!!」

オオツノオーク達は親の死を悲しんでいたわけではない。死骸に群がった彼らは、その死体を食い始めた。

「ブギイッ!？」

しばらくして彼らは、森の奥から何かが近づいていることに気づく。彼らの全身の毛が総毛立ち、恐怖で失禁しっぺんする者もいた。

その存在が姿を見せる。

「ふんっ、わざわざここまで連れてきたのに、この結果か……役立たずが」

「ブギイッ……!？」

「ブ、ブヒヒッ……!!」

現れたのは、全身が灰色の鱗で覆われた人型の生物である。背丈は人間の成人男性ほどで、尻尾が生えている。顔は蜥蜴としかげそのものだ。た。

蜥蜴人間の登場に、オオツノオーク達は怯えきつている。

「まあいい……こいつだけでも無事なら良しとするか」

蜥蜴人間はオークロードの死骸に近づき、手を伸ばして中の肉をあさった。そして血塗れちまみの経験石を取りだす。

そのままそれを丸呑みすると——蜥蜴人間の肉体に異変が生じる。

「ブヒヒッ!？」

「ブヒヒッ!？」

ざわめくオオツノオーク達。

蜥蜴人間の全身がわずかに膨れ上がった。目を血走らせた蜥蜴人間は、自らを抱きしめるように肩に両手の爪をくい込ませて耐え続ける。

数秒後、蜥蜴人間の身体の震えが収まった。

「ふうっ……まあまあだな、ふんっ!!」

身体の動きを確かめるように蜥蜴人間は首を鳴らし、近くにいたオオツノオークに向けて腕を

振った。

オオツノオークの頭部が吹き飛び、血飛沫ちしじまが上がる。

その光景を目の当たりにして、オオツノオーク達は恐慌状態に陥る。蜥蜴人間は腕にこびりついた血を舐め取った。

「ふむ……外見は醜みにくいが、味は悪くないな」

「プ、プギイイイイツ!!」

「おっと、そうはさせん」

オオツノオークの大群が逃げだそうすると、蜥蜴人間は口を大きく開き、火竜のごとく炎を吐きだす。

「アガアアアアアアアアアツ!!」

竜種のような咆哮が響き渡り、猛火は逃げ惑うオオツノオーク達を瞬時に呑み込んだ。

「プギアアアアアアアアアツ……!?!」

百体を超えるオオツノオークが燃え盛っている。

しかし、蜥蜴人間は炎を吐き続けるのを止められない。オオツノオークが完全に炭になるまで炎を放射し続けるのだった。

「フウツ……ちっ、やりすぎたか。やはり、この状態では加減が分からんな」

蜥蜴人間は黒焦くろこげの残骸に視線を向け、ため息を吐きだす。そうして、首から下げた髑髏のペンダントを忌々いまいましげに掴んだ。

「ふんっ!! ぐぐぐっ……くそっ!!」

破壊しようとするが——力を込めようとすると髑髏の瞳が光り、蜥蜴人間の手から力を奪ってしまふ。

喉の渴きを覚えた蜥蜴人間は、手についたオオツノオークの血を舐めた。

「あの人間めっ……必ず殺してやる」

蜥蜴人間はそう口にするのだった。

× × ×

リーリスとバルトスは兵士達に話を聞いて回り、兵隊長の動向を調べ上げた。

その結果、兵隊長が武器庫に髑髏形の魔道具を設置していた可能性は高く、火竜を引き寄せた犯人と見て間違いないようだった。

神妙な面持ちのバルトスがリーリスに向かって言う。

「むうっ……犯人は分かったものの、どうも様子がおかしいのう」

「兵隊長が何者かと入れ替わっていた、そう考えるしかありませんね。性格が変化した、武器庫へ

の入室を突然禁じた、潔癖症けつぺきしょうのように自分の部屋の掃除をするようになった……あまりにも怪しさ満点です」

「それはそうと、兵隊長はいつの間に抜けだしたのじゃ？ 我らが訪れたときはいたはずじゃが……」

火竜が出現する前、兵隊長はリーリス達と会話をしていた。どうやら、どさくさに紛れて逃げたようだった。

リーリスが思いだしたように言う。

「ところでルノさんはまだ戻ってこないんですかね？ 無事だといいいんですけど……」

「そ、そうじゃった!! ルノ殿は大丈夫なのか？」

ルノが飛びだしてから三十分近く経っている。まだ戻ってこない彼に、二人が心配しだすと、武器庫の撤去作業を行っていた兵士達が騒ぎ始める。

「あ、あれは……!?!」

「た、大変です!!」

バルトスが兵士達に尋ねる。

「今度はどうした!?!」

「りゅ、竜がっ……火竜が近づいています!!」

「ええっ!?!」

兵士の言葉に、リーリスとバルトスは空を見上げる。

接近する巨大な影があった。その影は、兵士が言ったように先ほどの火竜と瓜二つの容姿をしていたものの、全身が青かった。

新たな竜の登場に兵士達は慌てふためき、バルトスとリーリスも冷や汗を流す。そのとき、リーリスが気づく。

「あれ、あれって……」

「何を呆ほうけておる!! お主も將軍ならば戦う準備を……」

「いえ、よく見てください。頭の上に乗ってるの……ルノさんじゃないですか？」

「はっ!?!」

バルトスは年老いているとはいえ目は悪くない。接近してくる青い竜に視線を向けると、確かに頭部にルノの姿があった。

ルノがみんなに声をかける。

「あ、皆さん!! もう大丈夫ですよ!!」

「ルノ殿!?!」

「ちよ、何ですかそれ!? 今度は竜まで手て懐なまけたんですか!?!」

バルトスとリーリスが驚いていると、ルノは竜を示しながら言う。

「違う違う!! よく見えてよ!!」

巨大な青い竜に乗ったルノが両手を振り、砦の前に着地した。

その光景に誰もが呆然としていたが、当のルノは竜の頭部から飛び降りると、バルトスとリーリスのもとに駆け寄った。

「いや、さすがに死ぬかと思いました。今回はかりはかなりまずかったです」

「あの、その話も詳しく聞きたいところなんですけど……とりあえずは、これのことを説明してくれませんか？」

「い、いつたい……何なんじゃ？」

リーリスとバルトスは、ルノが騎乗してきた青い竜に視線を向け、どうして彼が竜を従えているのかを問う。

そこで、リーリスは違和感を抱く。

「あれ？ この竜……もしかして……氷？」

「氷じゃとっ!？」

「正解。これ、氷で作りだした竜なんです」

ルノが乗り物として利用した青い竜の正体は「氷塊」で作りだした竜の氷像であり、内部には火竜の死体が保管されていた。

ちなみに火竜の頭部は完全に失われていたため、氷で一から作つてある。

「いや、本当に大変だったよ。どうにかここまで持ってきたけど、これはどうしたらいいかな？」

「どうにかつて……本当にすごいですね、ルノさんは……」

「か、火竜を氷漬こやしけじやと……そんなことができるのか……!？」

リーリスとバルトスに続いて、兵士達が騒ぎだす。

「ゆ、勇者だ……勇者様が召喚されていたんだ」

「し、信じられない……まさか竜種を倒す人間がいるなんて!!」

「勇者なんておとぎ話だと思つてたよ……」

リーリスが、ルノの乗つてきた竜に視線を向けながら言う。

「火竜を倒しただけではなく、こんな巨大な氷で包んで持ち帰るなんて……本当にルノさんは規格外ですよ。もうさすがルノさん、さすルノですよ。さすルノ!!」

「何それ？ どういう意味？」

戸惑うルノに、バルトスがため息交じりに尋ねる。

「ま、まあ……無事で良かったのう。その、聞きたいことがあるんじゃないが……奴はもう死んでおるのじゃろうな？」

「死んでますよ。やつぱり凍らせないほうが良かったですか？」

「い、いや。そういうわけではないが……」

あまりにも精巧な氷の竜を見て、バルトスは冷や汗を流した。氷の竜から、今にも動きだしそうな気配を感じたのだ。

ルノはリーリスに尋ねる。

「これ、どうしたらいいですかね？ 帝都に持ち帰りますか？」

「こんなのを帝都に持ち込んだら、大混乱が起きますよ」

「それもそうか……」

そこへ、バルトスが呆れつつ言う。

「ま、まあ……水の竜のことは後にして、一度移送部隊に戻らぬか？ 他の者も待ちくたびれておるだろう」

ルノとリーリスは頷き、移送部隊まで引き返すことになった。

バルトスとリーリスには大型の氷車に乗ってもらい、ルノは水の竜——氷竜ひょうりゆうに乗ると、氷車を載せて飛んでいった。

ルノのレベルが上がったことでルノの魔法の力が上昇し、時速三百キロを超える速度で移動することができた。

----- 2 -----

時を少しさかのぼり、ルノ、リーリス、バルトスが砦に到着した頃。

彼らの抜けた移送部隊でもトラブルが起きていた。街に向けて草原を移動している際中、コトネが異変を感じ取った。

「……これは」

「ふるふるっ」

馬車の屋根の上でスライムのスラミンと戯たむれていたコトネの声を聞き、帝国四天王の老剣士ギリヨウが振り返る。

「む？ どうした？」

コトネは即座に馬車から飛び降り、耳を地面に押しつける。

そして彼女にしては珍しく険げんしい表情を見せた。

「……何か近づいている。大きくて……たぶん、すごくやばいのが……」

ギリヨウ、帝国四天王の魔術師ドリア、スラミンが反応する。

「何じゃと？」

「それは本当ですか？」

「ふるふるっ!!」

探知能力に関しては、コトネの右に出る者はいない。しかし警戒して周囲を見渡しても、コトネが言うような存在は確認できなかった。

皆が戸惑っている、コトネがぼそりと言う。

「……地上から近づいてくるんじゃない。地面……地中から接近してる」

「地中？ まさか!？」

「いかん!! 馬車から全員離れろっ!!」

ドリアとギリヨウは、接近しているという存在の正体に勘づき、慌てて兵士達に命令した。兵士達は怯えながら馬車から離れていく。

ギリヨウが護送中の森人族達の乗る馬車に向かう。馬車の扉を乱暴に開くと、森人族達は皆一様に啞然としていた。

「お主達も出る!! 死にたくなければ急ぐのじゃっ!!」

ギリヨウがそう叫んだものの、全身を拘束された王子のデブリは、同じように拘束されているハツキの膝枕で呑気に眠りこけている。

「……ふがつ!? な、何だ……もう着いたのか？」

目を覚まして間もないデブリを、ギリヨウは強引に抱えた。

そしてハツキに告げる。

「外に出ろ!! 足は自由に動かせるじゃろう!!」

「……分かった。おい、皆動けっ!!」

ハツキが他の森人族達に向かって叫んだものの、彼らは何が起きているのか分からずパニックになるばかりだった。

「何なんだいったい……」

「まさかこの場で我らを処刑する気じゃ……」

なかなか動こうとしない森人族達を、ギリヨウは一喝する。

「やかましい!! 早くせぬと全員死ぬぞっ!!」

何とか森人族達全員を馬車の外に出し終えると、ギリヨウはデブリを肩に担いだままロプスに近づく。

「サイクロプスよ!! こいつを儂の代わりに預かってくれんか？」

「キュロ？」

「え、ちょ、待って!? こんな化け物と一緒に……うわああああっ!？」

ロプスが不思議そうな表情を浮かべながらもデブリを受け取る。ギリヨウは仕込み杖から刃を引

き抜き、馬車に視線を向けた。

「……来る!!」

そして十数秒後、地面に地震のような振動が走り――

「シャアアアアアッ!!」

馬車を吹き飛ばして出現したのは、茶色い鱗に覆われた巨大生物だった。大きな蜥蜴のようなその魔物を目撃した兵士達は悲鳴を上げた。

「うわあああっ!!」

「な、何だ!？」

「これは……オオツチトカゲだ!! 何でこんな場所に……」

「お、おおっ!! こ、こいつは……!!」

「王子、危険です!!」

混乱を起こす兵士達に反し、デブリはなぜか目を輝かせていた。そしてロプスの手から逃れ、芋虫のように這ってオオツチトカゲに向かっていく。

止めようとするハツキの手を払いのけ、デブリは叫ぶ。

「お、おい!! お前には見覚えがあるぞ!! リディアの奴が飼っていたペットだな!! 僕を助けて

来て……」

「シャアアッ!!」

「ひいっ!? な、何でっ!？」

「これ、何をしておるか、馬鹿者がっ!!」

オオツチトカゲは近寄るデブリに襲いかかったが、ギリヨウがデブリを引き寄せ、すんでのところで食われるのを免れた。

デブリは目を白黒させている。

「な、何で……ほ、僕を忘れたのか!! ほら、お前の主人の友達のデブリだぞ!? 前に餌もやっただろう!？」

「何を訳の分からんことを言っている!! 早く下がれ!!」

「王子、こちらに!!」

「あ、ああっ……」

ギリヨウはデブリを護衛に向かって突きだす。

オオツチトカゲにはロプスとルウが対処していた。彼らは前に出ると、威嚇するように鳴き声を上げる。

「ガアアアアアッ!!」

「キュロロロッ!!」

「シャアアアッ!!」

自分達よりも巨体のオオツチトカゲに対し、ロプスとルウは一步も引かない。一方オオツチトカゲも怯む様子はなかった。

周囲を黒狼達が取り囲み、魔物達が威嚇し合う光景を見て、ギリヨウは息を呑む。

「すごい……」

「ギリヨウ將軍!! ここは私にお任せください!!」

ギリヨウに声をかけたのはドリアである。彼は砲撃魔法を放つ準備を整えると、オオツチトカゲに向かって氷属性の矢を放った。

「くらえっ!! 『アイスアロー』!!」

「シャアッ!!」

「何っ!？」

しかしオオツチトカゲは、先ほど出てきた穴に身を隠して回避してしまう。そこへ、ロプスがやって来る。

「キユロオオオオオッ!!」

「ちよ、何をする気じゃ!？」

馬車の残骸を持ち上げたロプスは、オオツチトカゲが潜った穴にそれを投げ落とした。

しばらくの間、静寂が訪れる。

「……出てこんのう」

「仕留めたのでしょうか？」

「グルルルッ……!!」

ルウが鼻を鳴らしながらゆっくりと穴に接近する。穴を覗き込んだルウは不思議そうに首を傾げた。

「ウオンッ!？」

「ど、どうしたのじゃ?」

「キユロロッ?」

続いて、ロプスがルウのもとに近づく。ロプスは穴を覗くと、ギリヨウのほうに顔を向けて首を横に振った。

二体の反応がよく分からないので、ギリヨウ自ら穴の底を確認する。

オオツチトカゲの姿は完全に消えていた。その代わりに、底には横に掘り進めたような穴ができている。

「まさかっ……いかん!! 他の馬車が狙われる!!」

「[[[[[スゥ……]]]]」

ギリヨウの言葉に、兵士達は馬車のほうに視線を向ける。

ちょうどそのとき、最後尾の馬車が止まっている辺りの地面が盛り上がり、地中からオオツチト

カゲが現れた。そのオオツチトカゲは馬に噛みつく。

「ヒヒインツ!?」

「アガアアアツ!!」

オオツチトカゲは馬の頭を噛み千切ると、続けてもう一頭の馬を押し潰した。

ギリヨウは刀を構えて走りだし、オオツチトカゲの頭部に向けて刃を振り下ろす。

「このっ!!」

「シヤアツ!!」

「ぬうっ!?」

しかし刃が頭部に届く寸前に、オオツチトカゲは再び地面に潜ってしまう。そうして素早く地中を移動していく。

杖を構えたドリアが盛り上がる地面に視線を向けた。

「このっ……『アイシクルランス』!!」

ドリアの杖から、ルノの「螺旋氷弾」と似た大きな氷の塊が放たれる。

「シヤアアアツ!?」

「よくやった、ドリア……ぬんっ!!」

ドリアの魔法が命中して地上に現れたオオツチトカゲに、ギリヨウが接近する。そしてその頭部に向けて刃を突き刺した。

「アガアツ……!?」

刃はオオツチトカゲの脳に達した。ギリヨウが刀を引き抜くのと同時に、オオツチトカゲの巨体が派手に倒れる。

ギリヨウは冷や汗を流しつつ言う。

「ふうっ……何とかなったな」

「お見事です、老將軍!!」

「『四天王万歳!!』」

兵士達が歓声を上げてギリヨウに駆け寄る。

その一方で、デブリはなぜか残念そうにしていた。

「あ、ああっ……リディアのオオツチトカゲが……あいつ、きつと悲しむぞ」

「王子、落ち着いてください!! あれはきつと違います」

「違う?」

デブリとハヅキの会話を耳にしたギリヨウは訝しみ、睨みつけながら尋ねる。

「お主ら、何か知っておるのか?」

「えっ!? し、知っているわけないだろ!! 馬鹿じゃないのお前っ……」

「王子……」

「分かりやすい奴じゃのう……さあ、隠していることを話せ」